

〔解説〕遊び場は学生にどう映るか

ドリームプレイウッズの取り組みは、子どもたちに日常的な屋外の遊び場を与えるものである。近所の公園で球技等の遊びが禁止されたり、遊具が撤去されたりするということがしばしば新聞等で話題となっている。このような、満足に遊ぶことができる空間が減少しているという意識のもと、ドリームプレイウッズは竹やぶを整備し、地域の子どもたちに居場所を与えている。さらには、そこでの遊び方も子どもたち自身が考えるといったことまでも意図しているのである。

ドリームプレイウッズは、ただ遊び場を作って設備の維持管理をしているだけでなく、季節に合わせてタケノコ祭りやハマラカ祭、収穫祭といったイベントを行っている。自由に遊ばせることに加えて、イベントを開催することにより、子どもたちには常に楽しめる場所として認識され、さらにドリームプレイウッズの存在価値を高めていると言えよう。

澁谷氏の講義の中では、昔と今の子どもたちを取り巻く環境や、大人たちの意識の違いが説明されている。今の子どもたちは公園で遊ぶこともままならず、保護者は子どもたちが怪我することを恐れて、もはや屋外で遊ばせることから控えるというようなことが見られる。その中で、遊び場を整備することによって、子どもたちにとっては安心して遊ぶことができる場所が生まれる。そこで遊び方を考えたり、多少の怪我をしたりすることで、子どもたちは学校や家庭では教えてくれないような知識や技術を学んでいく、というようなことが考えられる。

コミュニティ人間科学部の地域実習先として考えると、ドリームプレイウッズの取り組みは、今の子どもたちだけでなく、実習に行く学生にとってもまた珍しく映るのではないかと考えられる。2019年4月時点では本学部在籍している学生は1年生のみであり、彼らの多くは2000年度生まれである。2001年にドリームプレイウッズの準備委員会が開かれたことを踏まえると、「遊び場がない今の子どもたち」として想定された子どもの中には、彼らの世代における子どもの頃が含まれていると推測できる。屋外の遊び場所というドリームプレイウッズが、彼らにとってどのように捉えられるのか、という、運営するスタッフとは違う視点があることもまた重要であろう。

また、実習として行くからには、単に子どもたちと触れ合ったり、環境を整備したりするだけでなく、活動を支えている人や組織を理解する必要があるだろう。実際にどのような組織になっているか、その組織の中で職員がどのような仕事をしているのかという点もまた、地域実習における重要な学びである。講義の中で組織については言及されていなかったが、予め理解しておきたいところである。

日常的な遊び場として存在しているドリームプレイウッズでは、学生自身が、これまでの経験と重ね合わせながら、地域実習を行うことができる。卒業後に地域で活躍できる人材となるために、この実習は彼らにとって貴重な体験となりうることだろう。

(金子 佳寛)